

# オーウェル研究

第 40 号

特集 オーウェルの後期エッセイ  
(1938 ~ 1949)



日本オーウェル協会



Abbey Road 側から見た Langford Court (22 Abbey Road NW8 9DP)

不幸と教訓をもたらすために、ペストが再びその鼠どもを呼びさしまし、どこか幸福な都市に彼らを死なせに差し向ける日が来るであろうことを。(宮崎嶽雄訳)

カミュがこの小説のタイトルは『ペスト』か『恐怖政治』か、と迷っている。それを教えてくれたのは『アルベル・カミュある一生』(オリヴィエ・トッド著 有田英也・稻田晴年訳 毎日新聞社)である。そうか。ペストはナチズム、ファシズム、フランコ主義そして共産主義。医師はレジンスタンスか。

オーウェルはカミュとは一度も会っていない。1947年にアーサー・ケストラーの奥さんのマメーヌの双子の姉妹のシーリア・カーヴンに手紙で「カミュに会いにそこへ〔ドゥー・マゴーという店〕行ったことがあります。いつしょに昼食をすることになっていたのですが、病気のためにとうとうカミュは来ませんでした」と書いている。1945年の初めのパリだ。その時、ヘミングウェイに会って、共産主義者に対する自衛のためにピストルを借りている。

カミュはフランスの植民地であるアルジェリアに生まれた。父は1914年にマルヌの戦闘で死亡、母はスペイン系で耳が悪く字を読めなかつたという。オーウェルの出発点はインドで生まれ、植民地ビルマ(現ミャンマー)で警官をしていた。カミュは一度共産党に入党したことがある。記録によると、演劇関係の仕事をして、共産党をやめるときに脱党でなく除名を選んだという。オーウェルもビルマから帰つてからのパリで、自分の叔母さんネリーのつれあいのウジェーム・アダム(通称ランティ)に会つて、オーウェルは共産党的肩を持つようになつた。ランティはそれを捨てた、と言つた。同じ、結核にかかつた。カミュはアルジェリアの独立のために独自の道をとつた。カミュはPOUM(マルクス主義統一労働党)のメンバーや抑留者連盟などへ定期的に小切手を送つた。オーウェルはスペイン内乱でPOUMの軍に入った。どうもカ

ミュは売れなかつたオーウェルの『カタロニア讃歌』を読んでいたらしい。共に47歳で亡くなつた。

オーウェルは1946年4月にフィリップ・ラーブに宛てた手紙の中で、「あの本『動物農場』」に関して「いちばん面倒なのはフランス語訳の契約です。ある出版社は契約に署名しておきながら、あとから政治的理由で『だめだ』と言ってきました」…「カミュの言つたことは全く本当です。今やフランスの出版社は、アラゴンその他の連中の「命令によつて」望ましからぬ本(私の聞きましたところはヘミングウェイの『誰がために鐘が鳴る』もその一つだそうです)は出版できないそうです」と書いています。カミュとオーウェルが文通したのは確かのようだ。オーウェルはその年の9月に、クリスティとムーアあての手紙で「アンドレ・ジッド、マーロー、モーリヤック、ジャンポール・サルトル、アルバート・カミュ[以下略]」に『動物農場』を送つてくれと頼んでいる。カミュは1957年のノーベル文学賞を受けたとき、ストックホルム大学で学生の前で講演した。「私は常に圧制を糾弾してきました。また、アルジェリアの街角などで盲目的に実行されるテロも糾弾しなければなりません。いつの日か、私の母や家族を襲うかもしれないのです。私は正義を信じていますが、正義以前に私の母を守るでしょう」。カミュは1952年にすでに「私は非暴力の理論〔中略〕を研究し、この理論が実例をもつて説かれるに値するとの結論にほぼ達しました。しかし、そのためには偉大さが必要ですが、私には欠けています」と書いています。オーウェルは最後のエッセイ「ガンジーについての意見」において「南ア連邦で発展したサティヤーグラハは一種の非暴力的闘争であり」と書いている。ガンジーはその抵抗運動の記録をトルストイに送つた。トルストイはすぐ手紙を書いて「感激した」と言った。ガンジーの非暴力を私はかつて非武装主義と書いたことがあった。ガンジーは「目の前に犯される女性に対しては傍観するなら暴力を

用いて死ぬほうが良い」と書いている。カミュの「母」とガンジーの考え方は共鳴しそうだ。

カミュがオーウェルの『動物農場』を読んだのは確実である。1946年にカミュはケストラーと会つてすぐ仲良くなつた。『動物農場』を二人とも評価した、とトッドは書いている。トッドはこの著の序文にすぐオーウェルを、結論にはカミュとオーウェルの共通点と相異点を書いている。しかし、間違いがある。「カミュはオーウェル、ジッド、シローネ、ケストラーの共著『挫折した神』〔邦訳『神は蹠く (The God that Failed)』1950年〕——挫折した〔共産主義の〕神——に参加するはずであったが取りやめた」と書いている。オーウェルはもちろん書いていない。『神は蹠く』はリチャード・クロッスマントケストラーが相談して、共産党に入党したか、ソヴィエト連邦に好意を持ったが、後でその本質を知り、反ソ連を貫いた人々の著書である。リチャード・ライト、アーサー・ケストラー、イグナツィオ・シローネ、アンドレ・ジッド(一部はエニド・スター)、ルイズ・フィッシャー、スティーブン・スペンダーだ。その内容は面白く、ケストラーの「党言語」はオーウェルの『1984』と互いに影響しているみたいだ。スペンダーとオーウェルはほかの著書と突き合わせてみると面白い。スペンダーの「レフト・ブック・クラブ」で出版した『自由からの前進』は1937年の1月だった。3月にはオーウェルの『ウィガンピアへの道』。それらを読んだイギリス共産党のハリー・ボリットはスペンダーに入党をすすめ、オーウェルにはスペインに渡る手伝いを断つてゐる。私はジッドとシローネには前の『オーウェル研究』で触れている。カミュの作品は少ししか読んでないが、これから楽しみにしよう。

訂正『オーウェル研究39号』で、「詩人としてのオーウェル」の中の、クリックのA Life出版は1980年、デヴィソンのGeorge Orwell: A Literary Lifeは1996年、デヴィソン編『完全

版20巻』は1998年です。デヴィソンはクリックの〔まちがい〕に気が付かなかつた可能性が大です。

## 動物の命を軽んじる社会と オーウェル

西川 伸一

2020年12月22日に自民党の吉川貴盛元農林水産大臣が、自身の健康上の理由から衆議院議員を辞職した。とはいへ直接的なきっかけは、吉川氏が農相在任中に鶏卵生産大手「アキタフーズ」の秋田善祺元代表から大臣室などで、現金計500万円を受領していた疑惑によるものだろう。そして、2021年1月15日に東京地検特捜部は吉川元農相を収賄罪で、秋田元代表を贈賄罪でそれぞれ在宅起訴した。

秋田元代表による贈賄の動機として、「アニマルウェルフェア(動物福祉; AW)」に基づく飼育環境の厳格化への強い懸念があつたのではないかと推測されている。AWとは「家畜を快適な環境下で飼育することにより、家畜のストレスや疾病を減らす」ことをいう(農水省のHPより)。

AWを養鶏業界にあてはめた飼育基準案を2018年9月に国際機関が示した。それは「巣箱」と「止まり木」の設置の義務化を求めていた。一方、日本では鶏をカゴに入れる「ケージ飼育」が大多数を占めている。基準案を実現するには多額の設備投資をしなければならない。これを業界の危機と感じた秋田氏が賄賂で農相を動かしたのではないか。いずれにせよ、日本政府は2019年1月に基準案反対の意見書を提出している。

これらのことに関して、2021年1月13日付『朝日新聞』(大阪版)「声」欄に、島根県に住むある養鶏業者の投書が載っている。

動物の命を軽んじる社会とは

約100羽の採卵鶏を飼っています。新鮮な空気に十分な運動スペース、適度な日光など、飼育環境を整えれば病気になりにくいという自然卵養鶏の考えに基づき、飼育を始めて5年ほどになります。

寒さに強いが暑さには弱い。春になると産卵が活発になるなど、鶏にも感覚や感情、個性があり、私にとっていとおしい存在です。

この冬、大流行している鳥インフルエンザが見つかった養鶏場では、多くの陰性の鶏たちも一斉に殺処分されています。その数、数百万羽。日本の大規模養鶏場の多くは効率を優先し、密で運動もできず、風も光も浴びることができない劣悪な環境で鶏たちを飼育しています。そのため病気に弱く、こうした殺処分につながっているのではと思います。

この状況改善につながるであろうアニマルウェルフェア（動物福祉）が目的の国際基準案に日本政府が反対したことは、元農林水産相が鶏卵業者から現金を受け取った疑いがある問題を機に報道されました。

動物の命を軽んじるこの社会のあり方は、私たち個人の生き方や心のあり様にも悪影響を与えているように思えてなりません。

的確な主張に「我が意を得たり」と膝を打つた。さらに、すでにオーウェルが「動物の命を軽んじるこの社会のあり方」を『動物農場』でメジャーじいさんに告発させていることに思い当たった。冒頭に出てくるメジャーの大演説のシーンである。

「いかなる動物も、最後にはむごたらしいナイフを逃れることはできぬ。わしのまえにすわっておる若い食用ぶたたちよ、一年とたたぬうちに、おまえたちは残らず、首切り台にのせられ、断末魔の悲鳴をあげて命を終えることじゃろう。そんなおそるべき目にわしらはみながあわねばならぬ——うし、ぶた、にわとり、ひつじ、みんなじや。うまやいぬにしても、おなじような定めだ」（オーウェル2009: 14 ゴチック体は典拠文献のまま）。

このアジテーションに鼓舞されて、動物た

ちは動物解放に立ち上がるのである。メジャーの訴えは、いまでは動物倫理学が体系的に説明している問題意識の萌芽とみなすことができよう。すなわち、動物倫理学は「同じ哺乳類である牛や豚を強制的に繁殖させて、狭い場所に監禁して苦痛を与え、自然寿命よりはるかに短くその生を遮断し続けている。つまり殺して食べる」のである。（略）どうして人間ではありえないことが動物だと許されるのだろうか。（略）動物であるということは、その存在が全く道徳的に配慮されない理由になりうるのか」（田上2020: 251）と問いかける。

さらに、種差別という考え方を提起する。たとえば人種差別や女性差別など人間同士の間では明確に否定されている差別の論理が、人間と動物の間には無意識のうちにまかり通っている。これは人間であるという理由だけで、人間という種がそれ以外の種を差別する種差別である。言い換えれば、人間中心主義的な偏見である。差別を否定するのであれば、種差別も論理必然的に否定されなければならない。ところが、種差別を受け入れることで、人間は動物にメジャーが具体的に指摘しているような非道な苦痛を与え続けてきた。その痛みに寸分の想像すら働かせることはなかったのである。

それでも、「感覚や感情、個性」をもつ動物を殺して食べることでしか人間が生存できないのであれば、その行為は許容されよう。あるいは、「牛馬のように使う」という比喩があるが、動物を動力源として利用することが産業や交通に欠かせない時代もあった。しかし、肉食せずとも人間は生きていける。また現代ではクルマやトラクターが疲れを知らぬ鉄の牛馬になっている。種差別に合理的な必要性はもはやない。差別に反対するのであれば、その思考は種の平等に到達すべきなのである。

このような主張を展開する動物倫理学が究極的に目指すのは、AWを無視して「殺して食べる」など人間の動物利用習慣を廃絶することである。とはいへこれは現実には困難き

わまりない。

ところで、1990年代に「料理の鉄人」というフジテレビ系の人気番組があった。これに審査員としてレギュラー出演していた食生活ジャーナリストの岸朝子は、「おいしゅうございます」が決めゼリフだった。岸は死去する3か月前にそれに込めた思いをこう語っていた。「動物や植物の命をいただくことへの感謝の言葉です」（2015年6月25日付『産経新聞』）。動物の命を軽んじる社会から離脱する第一歩は、この意識の広がりからはじまるのではないか。

あるいは、具体的行動として、スーパーにはケージ飼育によらない「平飼い卵」が並んでいる。NPO法人アニマルライツセンターの活動の成果である（2021年2月16日付『朝日新聞』）。この卵を買おう！

#### 参考文献：

オーウェル, G./川端康雄訳(2009)『動物農場』  
岩波文庫。

田上孝一(2020)「動物と平等」新村聰・田上  
孝一編著『平等の哲学入門』社会評論社。

### 歴史記録改ざんへの意識を問う ——大学入学共通テスト世界史Bと 『一九八四年』

福西 由実子

今年が初めてとなる大学入学共通テストが1月に実施された。これまでの、知識を問う問題が大半であった大学入試センター試験と比べ、自分で問題を発見し、考え、主体的に解いていく力がもとめられる試験であった。この共通テストの「世界史B」（配点100点）の第3問に、オーウェルの『一九八四年』をめぐるクラスでの討論と、生徒の質問を紹介する出題があった。第3問全体を見ると、文学作品や歴史資料を読み取り、回答する問題

が並ぶ。『一九八四年』は設問Cで引用された。主人公が「歴史記録を改ざんする仕事」をするあらすじが紹介され、「歴史資料の改ざんは実際に行われたのか」との生徒役の質問が続く。さらに、18世紀の中国で、大規模な図書資料の改ざんが組織的に行われたことも書かれている。設問には「改ざん前の文章」「改ざん後の文章」が示され、歴史学の史料批判を強く意識させるものであった。

ではなぜ今『一九八四年』が取り上げられたのか。今回の問題は、「歴史記録の改ざん」について、歴史的事実だけでなく、現代社会でも問題になっている組織的改ざんの意図まで汲み取れる内容となっていた。たとえば、アメリカでは2017年にトランプ大統領が就任して以来、明白な嘘を「オルタナティブな真実」と説明する報道官が出現するなど、都合の悪い事実を隠蔽・改ざんする、まるで真理省を彷彿とさせる状況が生まれ、こうしたなか『一九八四年』がベストセラーになった。また、新型コロナの感染防止のために中国が取った強権的な対策、さらに、日本でも森友学園をめぐる財務省の公文書改ざんのニュース。『一九八四年』の世界そのもののような現代社会のありようへの問題意識が、出題につながったのではないか。

以下、長くなるが『一九八四年』にまつわる世界史B第3問Cの問題を転載する。

\*\*\*\*\*  
第3問 文学者やジャーナリストの作品について述べた次の文章A~Cを読み、下の問い合わせ（問1~8）に答えよ。（配点24点）

——中略——

C 世界史の授業で、イギリス人作家ジョージ＝オーウェル（1903～1950年）の小説『1984年』を紹介し、討論をした。配布された資料と、生徒からの質問票とを次に示す。